

健康万歳!



「ありのままの自然体」が一番の健康法

川喜多病院（京都市下京区）の院長

かわきた あきら

川喜多 彬さん

古き良き日本家屋の間取りが、そのまま医院となっている。畳敷きの待合室には、花を生けた床の間が設けられ、その隣には小さな窓が開き、「受付」と書かれてある。

「勤務医を経て、40歳の時にここで外科をメインに開業したんですが、実は妻の実家なんですよ」と教えてもらった。その声の張りは82歳とはとても思えない。

とにかく声が大きい。そして笑顔が絶えない。「まあ、それが僕の健康法かな。患者さんから病気以外の相談も受けたりして、つつい熱が入り、大きな声がより大きくなり、家の外にまで響くらしいよ」と笑う。（内緒話は不可）

診察室のイスには背もたれはない。「背もたれにもたれると、腰がいたくなるので患者さん用と同じイスを用いています」。そのため、たまたま患者と同じ視線で話しているようになるが、医者は患者さんとのコミュニケーションが大切だと話す。

「パソコンですか?」「字が下手なものでワープロ代わりに使ってます。最初はマウスの動きがおもしろくてね。操作が分からない時は患者さんに教えてもらうんです。データをパソコンで入力し、印刷した紙のレセプトを運動も兼ねて、歩いて烏丸四条の本会まで持参する。

開業以来、受付担当の奥さんと二人三脚でやってきた。「家内は一度受付をすれば患者さんの顔と名前を覚えるように努めているらしい」。取材中、隣で話を聞いていた奥さんが恥ずかしそうに笑った。

「うーん、ありのままの自然体が一番の健康法なのかもしれないね」。うらやましい限りです。